暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第三九六号〜

芒種　六月六日

今年竹

六月来る。はや六月、と季節の巡りの早さを思うのは、せわしく日々を過ごしているからでしょうか。そして、梅雨の季節を迎えることも気持ちとして大きいのかもしれません。二十四節気は「芒種」に。禾（芒）のある穀物を播く時期ということから、田植えが始る頃とされます。今日では田植えも済み、早苗がすくすくと育つ植田に、同じく禾のある麦は刈り入れ時を迎えています。「麦の秋」「蛍飛ぶ」「紫陽花」「梅雨の月」など、初夏から仲夏にかけて魅力的な季語が数多くありますが、こちらの一句で、新たな季語に出会いました。

今年竹　空をたのしみ　はじめけり　　大串　章

「今年竹」です。今年に生え出た竹であるので、この名があります。若竹ともいわれます。タケノコは皮を脱ぎながら盛夏には青々と丈を伸ばし、この句のように空を楽しむことができるようになるのでしょう。竹林をよく見ると、青々とした今年竹はすぐにわかります。

竹は、地下茎の節にある芽からタケノコが生じ、生長します。そして樹木で幹に当たる部分を「稈」と呼びますが、稈には節があり、中は空洞になっています。稈の節がそれぞれに生長するため、著しく伸びるのです。また私たちの目に見える稈だけでなく、地下茎も生命力が旺盛で、横にぐんぐん伸長していくとか。一年で五メートルから八メートルも地下茎が伸びた記録があるほどで、竹は地上でも地下でも繁殖力の強いことが特徴です。

じつは竹はイネ科の植物。日本では二十種ほどといわれています。竹はイネ科のなかでも木のように硬くなるのが特徴です。来月七月七日の七夕の笹飾りには、まだ稈が細く伐採しやすい今年竹も使われることでしょう。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁

おかげの里便り

おかげ横丁

○ 梅雨のおかげ横丁

6月11日頃は「入梅」といわれ、この時期から約30日間を「梅雨」と呼び、その語源は、「梅の実が黄色く熟す季節の雨」から来ているといいます。
おかげ横丁では、店の軒先に「てるてる坊主」を飾り付け、あじさいや苔玉、盆栽が並ぶ市が立ちます。
また、雨露にぬれ、しっとりと美しい町並みを眺めながらゆっくりと体験教室も楽しめます。
おかげ横丁で、心に残る素敵な雨の日の思い出を作りませんか。

と　き／6月17日(土)～25日(日)　10：00～17：00（催しにより異なる）
ところ／おかげ横丁一帯

● 企画展「苔を楽しむ」

雨が続く梅雨の季節。
見ているだけでも癒される苔の世界をお楽しみください。
苔玉、苔盆栽、苔テラリウムなどの展示販売も行います。

日　時／6月17日(土)～6月25日(日)　10：00～17：00
場　所／伊勢路名産味の館2階「大黒ホール」
協　力／岡山コケの会関西支部、岡山コケの会伊勢支部

● 伊勢の小さな森をはこぶ苔玉やさんによる苔玉づくり

伊勢の自然の苔を採取し、栽培などで増やした苔を使用した苔アートを作ります。

日　時／6月17日(土)、18日(日)　12：00～17：00（所要時間／約30分）
場　所／孫の屋三太前「特設屋台」
料　金／苔玉 2,200円（税込）～、苔盆栽 3,300円（税込）～、苔テラリウム 3,300円（税込）～
講　師／伊勢の苔玉やさん

● てるてる坊主づくり

「あした天気にな～れ！」と翌日の晴天を願い軒先に吊るすてるてる坊主を作っていただけます。
また、おかげ横丁内の店舗軒先にスタッフ手作りのてるてる坊主を飾り皆様をお出迎えします。

日　時／6月17日(土)～6月25日(日)　10：00～17：00
場　所／伊勢路栽苑
料　金／300円（税込）

お問い合わせ／おかげ横丁総合案内「おみやげや」電話0596-23-8838

五十鈴塾

○ 聖地巡礼～京都の神社③瀧尾神社～

瀧尾神社は東山にありますが、2度も御鎮座の場所が変わっています。創建は平安末期と推定され、ご祭神は大国主命、弁財天、毘沙門天。拝殿の天井には江戸時代後期の名彫物師の作である全長8メートルの龍が飾られ、あまりリアルなので夜な夜な水を飲みにでかけるという噂が立ち、一時期金網が張られていたそうです。幣殿や東西廊にも獏、鶴、鳳凰、水鳥、麒麟、干支の動物たちの彫刻があり、こちらも見ごたえ充分です。実はこの神社あの大丸に深いゆかりがあり、摂末社のひとつに大丸繁栄稲荷があるほどです。なぜ大丸がというお答えは先生にゆっくりとお聞きしましょう。

と　き／6月14日(水) 13:30～15:00
講　師／西山　克（京都教育大学名誉教授）
参加費／一般 1,700円　会員 1,200円
場　所／五十鈴塾右王舎
講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 五十鈴茶屋節気菓子

枇杷（びわ）
枇杷の実が鮮やかに色をつける頃となりました。枇杷は果実の美味しさはもとより葉に薬効があり、古くから、病を癒すために用いられたと伝えられています。
黄身餡を外郎生地で包み、甘く瑞々しい枇杷の実を表現しました。

夏衣（なつごろも）
六月は衣替えの月。
昔の人々もこの時季には、帷子(かたびら)という麻で織った薄い夏物へと衣替えをしていたといいます。
薄紅と緑に染め分けた餡を、透明な葛生地で巻き、涼しく軽やかな夏衣の風情にみたてました。

四片の花（よひらのはな）
四片の花とは、あじさいの別称。四枚の花びらがたくさん集まった姿から、その名が生まれたと言われます。
薄紫の錦玉を淡雪で寄せ、白餡を包みました。